
紺碧の夜の魔女 / 幽靈屋敷

黒田ぬた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紺碧の夜の魔女 / 幽靈屋敷

【NZコード】

N6494M

【作者名】

黒田ぬた

【あらすじ】

魔女である女と人である男。一人は今日も奇怪を求めて夜の街へ歩き出す。

(前書き)

書きたいことを全部入れたら収まりがつかなくなってしましました。
ですが折角の処女作なので投稿します。

ある夏の暑い夜に、あいつは何の前触れもなくやつてきた。

「よ、珠。^{たま}元気だつたか？」

数ヶ月振りに姿を見せたそいつは何食わぬ顔でそんな挨拶をしてきた。だから私は思いつきり扉を閉めてやつたのだが、あいつはそんなお構いなしに扉にきつちりと足を挟んできて、そのまま玄関へと乗り込んでくる。

「不法侵入だ」

「いつものことだろ」

最もなことだが、ひちひとしては冗談じやない。

「帰れ」

「数ヶ月振りに会つた彼氏にそりゃあないだろ」

「誰が彼氏だ、誰が」

だつていうのに、その自称彼氏とやらは招きもしないのに勝手にそのまま私の家の玄関で靴を乱雑に脱ぎ捨てて、奥のリビングへ続く廊下を歩き出した。他人の家の勝手を知つてゐる奴は平然とリビングに入つてどかりとやはり乱雑な音を立て私のお気に入りのソファーへと腰掛ける。

「でさ、また珠の興味を引くよつなどびつきり面白い話入手してきたんだけど。どう?」

「つまり、またとんでもない馬鹿な話を持つてきたと」

そして奴は、またいつものようにやけに演技がかつた仕草で腕を広げて、私にそんな話を振つてくる。奴は私が毎度毎度そんな話に興味はないと、はつきりと言つてあるのに本当に構いなしのようだ。どこまで傍若無人ぶりを披露する気なのかは知らないが、私はいい加減そんな奴に構つてられないでの自分の為に用意したコーヒーを残したままにしていたカップをテーブルから拾つて居場所を奪

われたときに座る窓際の椅子へと腰掛けた。

外は、深夜だから真っ暗だ。たまに通り過ぎていく車のヘッドライトや電灯の明かりが少しばかりあるが、ここは少し郊外に建てられた家だ。その明かりだって遠く、私の家は闇の中にそびえている。それを確認できるこの窓際の席が私は好きだったが、最近では奴から逃れる為の場所になりつつあるのが少し勘に触った。

「まあ聞けよ。街で最近、噂になってるんだよな。何がってさ、幽霊屋敷があるらしいんだよ。そこで最近、人がかなり消えてんだって。肝試しに入った若いのとかさ、そういうのが何人も帰ってきてない。つい一ヶ月前らしいんだけど、あんまり騒ぎになるもんだからつゝて警察も入ったんだってさ。だけど、それでも消えた奴らは見つかってない。警察の中にもその屋敷で幽霊を見たつて奴もいたって話で……な、実に怖い話だろ。興味深くないか？」

そういう話の時だけ、楽しげに笑うおかしな男 江野宮咲と

いう男はやっぱり変な奴だと今更再確認した。

/

俺が珠、と呼ぶ女は変な女だった。

本名は、藍沢珠樹あいざわたつきそれを俺は勝手に珠たま、と呼んでいる。

珠はそれをとても嫌がつたが、俺には関係ない。俺は人を呼びやすいように呼ぶ。それに今更珠樹なんて呼ぶのはとても他人のような気がして嫌だった。

少なくとも俺は、珠とは良い友人関係の間柄にあると思う。

出来れば本当ならば、恋人同士という段階にあることが好ましいのだが、それは珠の反応を見ていく限りまだ先の話になりそうだつた。

そう、俺。江野宮咲という男は藍沢珠樹に惚れている。

それも、初めて出会ったあの日からずっと一目惚れであれから七年間思い続けているのだからとんでもない片思いだ。勿論、好きで

片思ひなんてしてゐるわけじやあないんだが、珠のあの性格だ。中々進展などしない。最も、俺に落ち度がないとも言い切れないのが少し不服ではあるが仕方ない。

俺もこの性格だ。あいつに素直に気持ちを言つたとしてもどうも偉そうになつてしまふのは元來の性格で、どうしようもないこと。それでいてあいつ自身素直じやないといつのも更に影響してするずると曖昧な関係を七年間も続けてきてしまつた。

そんな関係を続けてゐる、珠という女。

実はこの女、変というのはその辺にいる女のよう媚びたりしないだけじゃなくて、元の生まれからしておかしいのだ。

なにせこの女、 実は魔女だつたりするわけで。

珠は、見た目は普通のどこにでもいるような、本当に普通平凡な容姿を持つた女だ。強いて特徴をあげるならば、その目力、と言つたところか。

髪も瞳も日本人らしい黒の色を持つた珠の瞳は、やけに凜々しくいつだつて真つ直ぐ物事を見つめている。それは珠の性格がそう体言しているのかもしれないが、俺にはそれが堪らなく魅力的だつた。だつて最初惹かれたのもその瞳の真つ直ぐさだつたから。

そんな珠は今、白いシャツにジーパンというラフな服装で窓際の、彼女のいつもの定位位置に腰掛けている。夜風に少しばかり伸びた黒髪を揺らすその姿は、いつ見てもどこか絵になつていて本当に美しい女だな、なんてらしくもないことを思わせられる。

それらも全て惚れた弱みという奴なのだろうが。

そんなことをぼんやりと俺が考へてゐると、珠の鋭い視線が此方に向けられていた。

「何？」

「私は、行かないぞ」

はつきりとした口調で、そんなことを告げられた。だが俺はやはりそんなことを関係なしに頭の中で珠と明日の夜にでも例の幽霊屋

敷に行こうかなんて考えている。それが解ったのだろう。珠は更に顔を歪めて俺を責めるように見つめる。だが俺はそれに答えない。答える必要はなかったから。

「珠だつて興味あるだろ、幽霊屋敷」

「ない」

「まあそういうなつて。この街を管轄してゐる魔女としては街の異変は放つてはおけないんじやないのか？なあ」

そう、そういうえば結局はこのお人よしが自分に付き合ってくれるなんてことは分かつてゐる。所詮、珠は素直じやないだけで俺のこの面倒ごとに付き合つのは嫌いではないんだつて俺は知つていたから。

/

江野宮咲は、変な男だ。

奴と出会つたのは、私がまだ学生といつ身分にありセーラー服という青春そのものの服に身を包んでいた頃。まだこうして、きちんと己の生き方を選べずに流されながら生きていた時代の話。

奴は転校生という姿で私の前に現れた。つまらない日常、つまらない学校生活、その中で毎日何もなく過ごしていた私の前に奴は急に現れ、私の親愛なる、愛でるべきつまらない日常を一気に慌ただしいものに変えていつたのだ。

誰一人、そんな日常を無関係に過ごして來た私に話し掛けでは来なかつた。多分、私のそんな態度が周囲にも浸透してゐるのだろう。簡単に言つてしまえば私は浮いた存在。人付き合いを好まない人種として目立ち、そして孤立を極めていた。それは嘆くべきものではなく寧ろ喜ばしいことだった。私は人付き合いというものが苦手だったからだ。

そんな私に、奴は声をかけて來た。それこそ何の躊躇いもなく、だ。

「 よう、あなたが藍沢珠貴あいざわたまきだろ？」

粗野な問い掛け。そして校則を違反した茶髪に、似合わない黒い瞳。着崩れた制服はだらしなく、初対面だというのに名前を呼び捨てにし、奴は定められた席ではなく私の隣へと勝手に座つて。それから始まつた、江野宮咲えのみやさきという男との奇妙な関係は、今年で七回目の夏を迎えていた。

私は、魔女という生き物なのに こんな普通の男との付き合いが続いているなんて、また馬鹿ばかげた話だけれど。

魔女という生き物は、原則として独りを好むものだ。

それは孤独という存在が、魔女という魔力を高めるものだから。だから魔女は、人里から離れた場所に家を構え、下界からその家を結界という拒絶で断絶して…そして一人で暮らす。家族とは、物心がついた頃から別れて修行するのだ。私の場合、師匠は私の祖母だった。彼女は生まれながらの魔女であり、私に魔女としての才を見出した人である。私は彼女を尊敬し、敬愛していた。だが彼女は…世間や親類からは変わり者の変人として有名な、やはり浮いた存在だった。

それも当然だろう。彼女は私の知る限りその命が尽きる瞬間まで、孤高な魔女として生き続けた人だから。

今、私が暮らすこの家も元は彼女の物だった。私は彼女が死んだ、9年前に彼女から全てを、そう。その研究されていた魔法から何もかも全てを継いで、此処に居る。

その魔女の仕事である、魔女の役目まで含めて。

魔女の役目 それは、己の血脉が息づく街を守るという、生涯背負う役目だ。

「 じゃ、明日の9時に駅前で待ち合わせだぞ。遅れるなよ」

やはり江野宮咲という男は勝手にそんな事を言い残して、帰つて行つた。奴が此処に居たのはたつた數十分のことだというのに、まるで長居をされたような疲労感に襲われていた。：本当にあいつの後は、疲れれる。そんな氣だるさを紛らわそうと私は新しくコーヒーを淹れ直す為に立ち上がつた。奴がさつきまで占領していた私の特等席。今度はそちに座ろうと決めて。

夢を見た。

それはとても古い夢で、まだ彼女が生きている頃の夢だ。彼女はいつだつて微笑を浮べて、浮世を笑つていた。現世に存在する、最も時を生きた魔女。

それが彼女の形。

だから彼女は誰よりも浮世を愛して そして憎んでいた。

「珠樹、お前は無になつてはいけないよ

それはいつだつて彼女が繰り返してきた口癖。何度も何度も、そう…やつと待ち望んだ死の淵に立たされた時だつて彼女はそれを口にして、旅立つて逝つた。

そんな彼女に対する私の答えも、決まつていた。いつだつて優しくけれど厳しくそう告げる彼女に、私は頷くしかないのだ。

はい、とはつきり理解を告げて…例え、分かつていなくても。

そう、私には彼女の言う”無”というモノが理解できない。

それは、彼女が亡くなつてしまつた今でも同じ。

”無”とは何か。

そして、”無”にならないとはどういう意味なのか。

「無になつては、いけないよ

彼女は最期まで、その意味だけは教えてくれなかつた。

夜は深まつていく。

けれど、現世になつて灯りを手に入れ人間たちは、夜の闇さえ奪つてしまつた。だからもう直ぐ夜明けになるというのに 眼下の街にはまだ、灯りが存在している。

車のライト、それに家の窓から漏れる光。

珠樹はその光を、暗闇に包まれた部屋の窓から眺めている。…愛用の真っ白なマグカップを持つたままぼんやりと街を見下ろす。その黒い瞳に映る街は、眠ることを忘れてしまった街。その街を、かつて珠樹の師は死んだ街と呼んだ。

闇から逃れる為に、人工的な光で己を誤魔化して死んだ街。

夜とは人にとつて無くてはならない闇。闇とは人が生きる上で絶対に切り離せない存在。だというのに人はそれを恐れた。何故ならば夜とは、人の領分ではなかつたからだ。夜には夜を領分とするものたちがいて、我々人は太陽に愛された存在。その寵愛を受ける代わりに、夜には拒絶してきた。光を求めるのは、人が闇に拒絶されたから。

かつて 禁忌とされた火を手に入れてしまったその日から、その関係は崩壊の一途を辿つているのだけれど。

そんな、魔女しか識つていらないような現実を私は一度だけだがただの人間である筈のあいつへと、咲へと漏らしたことがある。あれはやはり夜のことで、私はやつぱりあいつにいつもの特等席を取られてあの窓辺へと移動していく…手にはやはり若干温くなつたコーヒーがあつて。

どうしてそんな気にさせたのか分からない。どうして口にしてしまったのか分からない。だけれど私は確かにその時、本当に眞面目に咲に対してもう魔女として知りえる死の街について語つた。奴が興味を持ち、そしてその好奇心がくすぐられるという奇怪を孕んだ街の姿を教えた。

奴が求めてるのは、人間としての非日常。不思議、奇怪…そんな言葉が羅列するような、現実を求めて奴は夜の街へと繰り出してくる。典型的な愚かな人間で、科学の進歩によってその分からぬ何か、分からぬ存在への恐怖を忘れることにした人間たちの中で、あえてそれを求める者が奴のような人種だ。

そんな人間、テレビを見ているだけだって山ほどいるが奴の場合は実際にそれを引き当ててしまうのだから…余計性質が悪い。

そう、だつてこうして何年と関係を続けてしまっている私という存在すら、その奇怪に俗するものであるのだから。

だから、私は奴が持つてくる…面倒な話を全て無視するわけにはいかないのだ。出来れば関わりたくないそれは、どうあっても逃れられない私の存在する領分のもので、奴の領分ではない。

私は魔女があるが故に、奴を拒むことが出来ずにこうしている。

あいつはただの人間で、私は魔女だとうのに。

奇怪を愛した男のせいで、私は今宵もこうして答える得られない自問自答を繰り返している。

「……馬鹿もの」

知らなければ、どれだけ幸せだったのだろうか。

/

誰かが私を幽霊だとう。

幽霊、それは姿が見えなくて触れなくて、怖いもの。

おばけとかそんな風に呼べるもの。

だつたら私はそんなものじゃない。

だつて私はまだ、生きてるんだから

：

「で、ここがそうなのか?」

約束通りの夜9時、駅前で待ち合わせた二人はそのまま江野宮咲が案内するままに街の郊外、位置的に言えば珠樹が住む屋敷と全くの正反対の方角に位置した古びた家の前へと来ていた。今夜は、この季節だというのに肌を撫でる風が冷たい。住宅街から少しはずれ、街灯すら遠いその場所にあるその問題の幽霊屋敷は見るからにその存在の異様さを放っていた。まず、普通の人間ならば避けて通るようなそんな空気。悪寒、寒気とも呼べるそれを好奇心に満ち溢れた

咲は寧ろ満足とばかりに閉鎖された門の錆びた破片をボロボロと崩している。それを見ながら珠樹は呆れた溜息を吐くばかり。

だが、ここに来てもう帰るわけにも行かなくなってしまった。何故ならば、その幽靈屋敷は本当にそうであったのだから。

「…お前はいつも当たりばかり持つてくるな」

「はは、ミステリーハンターとしては当然のことだ」

「いつからそんなものになつたんだ、お前」

ふざけたことを言う咲に珠樹は若干不機嫌そうに返す。

江

野宮咲の性質の悪いところは、その奇怪を好む性格だけに留まらない。江野宮咲という男は、本当にその奇怪を見つけてしまうのだ。本人としては好んで求めるものを得られるのだから満悦だろうが、それに付き合わされることになる珠樹としては冗談ではない。といつてもそんなの自業自得と放つておけばいいだけの話なのだが、それだつて管理者の立場からしてみればそういうわけにもいかないというわけで。

その問題の幽靈屋敷というのは、一見普通の民家のように見える。…大分痛み、古びてボロボロのところを覗けば。だが民家にしては少し大きく、故に幽靈屋敷、などと呼ばれるようになつたのだろう。現在の時刻は午後10時を少しばかり過ぎた頃だ。街は僅かにだが昼間の喧騒をなくし、静まり返っている。ここは街の中心から外れた場所にあるから余計、その静けさはその幽靈屋敷を不気味なものへと演出していた。一人を撫でる肌寒い風は、屋敷の痛んだ窓やら壁やらを軋ませて更に不気味な音を立てている。…だが珠樹が感じているのはそんな一般人が感じる恐ろしさではない。

魔女たる珠樹にはその幽靈屋敷を包む異質さが目に視えていた。

それが、江野宮咲が見つけてきてしまつ本当の異質であり常人ならば拒絶する異形そのものの姿である。

「やつぱりいるのか」

ただ黙り込んだ珠樹に咲はどうか嬉しそうに問いかける。

故に、珠樹は思いつきり 苛立ちを込めて、頷いたのだ。

「ああ、大正解だよ。馬鹿者め。…また厄介なものを見つけてくれたものだ」

珠樹の闇のような黒い瞳が、幽霊屋敷を捕らえるそれを見つけていた。

幽霊とは、人の魂がこの現世に未練を残して残存してしまったそんな魂の残骸である。

肉体を失い、心も失ってただその抱き続けた未練・恨みや憎しみといった様々な感情に捕らわれて、現世に留まつて墮ちて行くだけの存在。

中には守護霊などと呼ばれ神化した存在もいるが、それはあくまで一度天国とやらに逝つた存在だ。

現世に留まり続けた人の魂に、そんな救いはありはしない。

ただその未練が晴れるまで、人を呪い現世を漂い続ける。

そんな、哀れな人の魂の末路が幽霊と呼ばれる存在。

「だから放つておけば厄介なものにしかならないんだ。お前等の言葉でいう悪霊なんて、そんなものだ。現世に留まり続け恨み続けた人は鬼にすらなるんだよ。まあ、生きてる人間だって時に理性の枷を取り落つて殺人鬼という鬼に化けるんだからその魂が悪鬼になるなんてことは当然といえば当然のことだ。鬼は闇が生み出したものじゃない。結局は人が生み出した、人の姿をした化け物だ」

幽霊屋敷の廊下を進みながら、珠樹はそんなことを語りだす。その後ろには勿論咲が続いていて、珠樹が指の先に灯した明かりを頼りに珠樹が進む方へと歩き続けている。

珠樹には視えている。ここに留まり続けている幽霊の姿も、その居場所も。

だから咲はただその後に続けばいい。咲の仕事は珠樹をこの場所に連れてくるという時点で終わっているのだから。

珠樹は魔女という生き物だ。それは人から外れた存在で、こうし

た： そう幽靈なんかと近い存在、珠樹が異形と呼ぶものたちに近い場所に生きる者たちのことをいう。咲にとつては珠樹はただの自分の同じ人間の女にしか見えていなくても、珠樹にとつて自分は普通の人間という全く住む世界の違う生物なのだという。

今でも咲にはそれが理解できずにいたが、確かに珠樹が使う魔法という不思議な力も実際に存在し、そして珠樹が観ている世界は自分が見える世界とは全く違うものだというのは理解していた。

咲には異形を感じることの出来る力がある。

そのお陰で今まで咲は自分が興味を持つその異形たちに触れ合つことが出来たが、それはあくまでも少しばかり感じることが出来るということだけの話で。

咲にそちらの世界へ干渉する力はない。

それを持つのは同じ、異質を持つ者たちだけなのだから。

咲は、普通の人間でしかない。

例えどんなに望もうとも、変えようの無い現実。

だから咲は、出来る限りその異質たちに干渉する。珠樹という、自分の手の届く場所にいる彼女の存在を利用して。

愛する女と、同じ世界を観るために。

「……結界か」

今にも抜けそうな床を進んでいた珠樹が小さく呟いた。珠樹の指先には彼女が呼び出した火が彼らのいる周囲を照らし出していたが、まだその先には暗闇がある。この屋敷 자체はそんなに広いものには見えなかつた筈だったのだが二人がいくら進んでも廊下は真っ直ぐなままで、ただ壊れた廊下と割れた窓、そして僅かに残るここで誰かが生きていた生活の残骸が床へと散らばつているだけの風景が永遠と続いている。

それが意味するのは、簡単なことだ。

「閉じ込められた、か？」

「そちらしいな」

けれど一人の会話に、焦りはない。まるで他人事のように呟きな

がら珠樹は指の先に出した炎を、消した。途端に一人へと、周囲に散らばつていた闇が襲い掛かつた。まるで光がなくなるのを待つていたかのように、影へと成り下がつていた闇たちが一斉に彼らへと襲い掛けつてその身体を包み込む。…一人の少しばかりの抵抗に、闇は揺れた。だがそんなものは無意味だ。闇は容赦なく一人の身体を包み込み、そして 消してしまつ。そして、幽靈屋敷に再び静寂が戻つた。

侵入者である二人の息遣いすら、もうない。

闇によってもたらされた静寂。

闇が奪つた生の息遣い。

そんなものは、もうどこにもない。

『よかつた』

故に、彼女は笑つた。……………これでまた、静かに眠れると安堵して。

「何も良くなはないぞ、お嬢さん」

だが、魔女はそれを許さない。 魔女が、魔法を使う。その血に眠る契約を呼び覚まし、その魂に刻まれた術式を解き明かし、魔女が魔法を行使する。闇に覆われた屋敷の廊下に、火ではない光が灯つた。それは魔女の周りをぐるぐると回り、廻り、そして陣を形成していく。

魔女の黒い瞳が、闇の中の彼女を捉えた。

「見つけた、」

無表情を貼り付けたような、恐ろしい魔女はその時確かに笑みを浮べて彼女を見た。ぐるり、と彼女の世界が回転する。魔女が、笑う。魔女の使つた魔法が 彼女へと襲い掛かつた。

彼女はずつとずつと独りだつた。

彼女の大切な家族は皆彼女を置いてどこかへ行つてしまつた。だから彼女はその悲しみに泣き崩れ、この屋敷で独り泣き続けていた。

なにある日、知らない男たちが屋敷へと入つてきたのだ。

この屋敷は、彼女の大切な家族との思い出がつまつた大切な場所なのに男たちはそれを土足で踏み荒らす。

男たちは、彼女の思い出を汚した。

許せなかつた。

彼女は悲しみから怒りへと抱くものを変え、その男たちを屋敷から追い出した。

そう、最初は追い出しだけだつたのだ。

けれどどうしてだらう、彼女の屋敷にやつてくる人間たちは後を絶たなかつた。

彼女は独りで悲しみにくれていたかつただけだつたのに。

それを、彼らは邪魔しにやつてくる。

だから、彼女は彼らを殺すこととした。

消してしまえば、二度とやつてこないとthoughtたから。

そうすればこの大切な場所を守れると思つたから。

だから、彼女は

「こうやって、飲み込んでつたわけか」

闇に飲まれたはずの魔女が笑う。

常人ならば決して抜け出せないその闇の中で魔女は光も持たずに笑みを浮べていた。その片手には男の腕が握られている。：常人である咲は、気を失っているのだろう。けれど存在すら消えてしまつはずだつたその男までをも掴みながら、魔女は彼女へと微笑んだ。

その微笑みは、決して優しいものなどではない。

見るものを、見せるものを恐怖に叩き落すような

残酷な笑

み。

魔女の周囲を、彼女には理解できないものたちが巡る。

魔方陣はそれを呼び出した主を守るように主の足元を照らし、彼女が招いた闇を打ち消していた。

有り得ない こんなのは決して有り得ない。

彼女はその目の前にいる、異常に慄く。それは初めて感じる恐怖。こうなつてから初めて感じた、恐ろしさ。 この居場所を奪わること以外に、恐ろしいことがあつたなんて。

「おい幽霊、私にお前のそれは通用しないぞ」

魔女は更に恐ろしいことを口走る。その細腕で自分よりも大きな体格の男の腕を掴んだまま、闇に落ちてしまった男の体を確かに守りながら魔女は彼女へとその黒い瞳を向けていた。 視えるはずなど、ないのに。けれど魔女は確かに彼女の姿を、彼女の存在を捕らえている。その敵意に満ちた瞳が、彼女の瞳を射抜く。

あれは、何？

『あなた、だれ』

故に、彼女はそれを口にした。 今更聞いても何の意味も無い問いを。けれど、口にはせずにいられなかつたその恐怖を。

魔女が笑う。

「魔女さ、名は藍沢珠貴という」

そして珠樹は、その血に生きる魔力を

開放した。

思い描くのは、月。

月とは魔力に満ちた宙に浮かんだ魔力の根源。

闇の住人たちは皆、その光を糧に生きてきた。

あの太陽が、光の住人たちの糧であつたように。

そして魔女は闇の住人。

その血脉に確かに魔を住ませた

人にして人にあらざるもの。

魂を穢しながら生きてきた、魔に魅せられたもの。

それが、魔女という存在。

の。

幼き魔女は月を描く。

その血脉に刻まれたように。その魂が記憶するように。

ただただ、本を読み解くようにその身体に染み付いた魔法を行使する。あんな、光を灯すようなそんな小さなものではない。

それは破壊の力を意味する、攻撃的な魔法。

「馬鹿だな、お前は」

珠樹の声が、幽靈屋敷に響く。その目の前では、幽靈と呼ばれた少女の靈魂が、珠樹の放った魔法によって焼かれていく。淨化の力を持つたその炎は泣き叫ぶ少女の魂を容赦なく捕らえて、その残留した想いを消し去つていいく。それは決して救いなどではない。

「さつさと成仏すればよかつたんだ。こんな現世に留まるなんて」

少女の幽靈が招いた闇が、薄まつていく中で珠樹の無機質な声はどこまでも澄んで響いていた。

天井には　咲でさえ認識できる程の力を持った、魔法の陣。燃え盛る炎の中で、少女が苦しんでいる。涙を流し、決して届かない声で叫びながら。

「……何、やつてんだよ。珠樹」

咲は思わず口にしていた。

こんな光景を見るのも、もう何度も慣れたこと。いつだつてそうだつた。珠樹はいつだつてこうして勝手に自分が引き当てた異常を自分の知らない間に処分してしまう。いや、それが間違つていることだとは咲だつて思つてはいない。だつて自分はそうしてもらう為に、そして珠樹はそうする為にこうして自分の持つてきた奇怪な話に付き合い、その原因を処分する。それが珠樹の仕事で、咲はそれを理解していた。だが、理解はしていたが　　決して納得しているわけではない。

「止せよ…やめてやれ」

ようやくはつきりしてきた意識で、咲は廊下へと立ち上がる。今まで支えられていた珠樹の細腕を、今度は自分から掴んでその身体

を引いて。けれど珠樹は振り返らない。彼女の視線は ただも
がき苦しむ少女の幽靈へと向けられている。

「何言つてんだ、こいつはもう何人も引きずり込んでる」

そんなこと、咲だつて知つていた。こここの幽靈はもう何人もの人間を連れ去つている。だつてここに入り込んだ人間は…何人も帰つて来ていないと、咲は事前に調べていたのだから。だから、来た。この奇怪に触れる為に。

だから、咲に今の珠樹を止める理由なんてない。なのに 咲は掴んだ腕を放せなかつた。珠樹の身体を自分へと向けさせて、咲は言つ。

「ちゃんど、成仏させてやれ」

死にたくない。咲の耳に、少女の悲鳴が届く。

「そういうのは、その手の専門家に頼むんだな。
私はただ処分するだけだ」

けれど、決して魔女はその異形を許しはしなかつた。これ

が、魔女の定めだから。

/

少女は自らの死を受け止められずにいた。

そのことが彼女を現世へと留まらせ、そして大切なものを失つてしまつたというのに。

それでも彼女は自らの死を否定し続けた。

その死さえ、忘れて彼女は独り寂しさの中で泣き続けていた。

『いや、死にたくない…！』

けれど今、そんな少女へと死の恐怖が襲い掛かつてゐる。

靈体であるはずの少女の身体へと、その異質な炎は容赦なくその不

透明な、不確かな存在を絡めとり消滅へと招いている。痛みなどとうに喪つたはずの少女の身体に激痛が走る。…それは、炎で焼かれる痛みなどではない。身体が、存在が、唯一彼女が持ちえていた僅かな存在が消えてしまう、痛み。

少女は必死にもがきその痛みから逃れようとする。けれど、そんな少女を見据えるその恐怖は決してそれを許さなかつた。

今夜、この屋敷へと侵入してきた者たちは今までの人間たちと違つた。

少女は己の招いた闇の中で一際、深い闇を宿した瞳を見る。その瞳は、少女の存在そのものを否定していた。

「お前は、さっさと死ぬべきだつたんだ」

いや、死にたくない。

「そうすれば、楽に逝けたのに」

助けて、いや。

「なにお前は、人を殺めてしまつた」

いや、いやいやいや。

「お前は、天国とやらには逝けないよ。
ごと、消え去るんだ」

ここでの墮ちた魂

死にたくない!!!

「、珠…！」

魔女がその炎の火力を増した瞬間、その腕を再び咲が掴んだ。

魔女といえど、珠樹の肉体は普通の歳相応の女のそれとは変わらない。故に同じように歳相応の肉体を持つ咲に腕を掴まれ、引き寄せられればその力には負けてしまう。

魔法さえ切れさせはしなかつたものの、珠樹の身体は咲の腕の

中へと捉えられていた。

「……何をしてる、馬鹿」

珠樹の苛立ちに満ちた声があがる。だが咲だつてその腕を緩めた
りはない。

「…珠、他に方法があるだろ。消してしまって以外に」

「…やっぱり、お前は馬鹿だよ。言つただろ、あいつはもう鬼の類になつてる。既に手遅れだ。人を殺めた時点で、あいつの罪は重い」「だけど、」

咲は、炎の中で苦しむ少女の姿を見る。必死で生きたいと、叫んでいるその少女。その気持ちは真つ直ぐで、ただそれだけで…咲にはそんな少女の残酷な消滅を受け入れられない。例えこの幽霊屋敷の、幽霊が既に何人の人間を飲んでいた悪靈だとしても、咲に見えるのはまだ必死に生きたいと叫ぶ少女の姿だ。

「だから、お前はこんなことやめろって言つたんだ。…お前は奇怪を、好みすぎる」

咲の腕の中で、珠樹がただ淡々と咲を責め立てていた。その言葉は何度も何度も咲に告げられた言葉で、咲はそのたびに大丈夫だと返ってきていた。だが今は、何も言い返せない。珠樹の声がそれを許してはいけない。

「お前の感覚は、麻痺してるんだよ咲。異常を異常として受け止められない。…奇怪に触れすぎたお前は、あれが可哀想な少女に見えてしまふ」

そして、珠樹の手が咲へと伸びて - 酷く優しく、その頬へと触れた。

「よく見るんだ、咲。……………あれば、異形だ。化け物なんだよ」
瞬間、咲の視界を 閻が覆う。

咲は何度も何度もこうして異形たちに触れてきた。
珠樹と一緒に、自らが望んで。

それは珠樹と同じ世界を見る為の、愚かな行為。

決して共有できないその世界を、異形に触れている間だけ交わることが出来る。

咲はそう想っていた。

だつて異形に対峙した時だけは、咲は珠樹の魔法を見ることが出来る。

視ることが出来るといつことはつまり、その世界に干渉できているということ。

咲はそう想っていた。

けれど、実際は違う。

本当に咲はただ、その世界を見ることしか出来ないのだ。

干渉など、出来はしない。

だが咲はその事実を認めたくはなかつた。

だつて認めてしまつたら

咲は、珠樹を失うことになる。

珠樹は魔女で、異常であり異形であり…咲が干渉できない存在で。例えどんなに表面化で関係を築いても、その本質はあまりにも異なつてゐる。

魔女たる珠樹は、普通の人間である咲には遠い存在でしかない。けれど咲は、そんな珠樹を愛してしまつた。

だから必死でその溝を埋める為に、走つた。

そして見つけた。唯一自分が珠樹とその時を共有できる時間。

それが、こうして異形と対峙した時で。

だから咲は異形を望む。異形を探す。そして見つければ珠樹を連れ出して二人で異形へと対峙する。その瞬間だけは、自分たちの世界が一つになつたという錯覚を得ることが出来たから。

だつてそうだ。普通の人間ならば異形にすら触れられないで、その存在すら認識できずに終わつてしまつのが普通なのだから。

だが自分は違う。自分はこうして珠樹と一緒にその存在を認識し、確かに触れている。

それが、咲には何よりも嬉しかつたのに。

「それは、間違いなんだよ咲。お前は人でしかないのだから」「魔女は、それさえ許してはくれずには咲に普通の人間だと思わせる。

だから咲が次に見たのは 炎の中で醜い姿を曝す、女の幽霊。死してなお、生にしがみつこうとするその醜さと執念を露にさせた、おぞましい姿。

あれこそが、異形。

まさしく、人から成り果てた鬼の姿で。

「……これで、终いだ」

珠樹は、それを焼き払った 灰すら、残さずに。

/

幽霊屋敷という、一種の異形の世界を保っていた主が消えた瞬間、その廃墟はただの廃墟と化した。一人が立つのは今にも床が抜け落ちそうなばかりの廊下の、最後でその奥にはやはりボロボロに風化してしまった部屋がドアすら開け放たれたまま、月明かりに照らされている。

ただ何となく、その部屋には少女が生きていた痕跡が確かに残っているように咲には思えた。…汚れた部屋に転がる壊れた人形や、破かれたように散らばった衣服たちがそこにいた主の生きていたことを確かに証明している。けれどそれは同時にこここの住人はもう既にいないのだと、現実を浮き彫りにしていた。…生活の痕跡はあつたとしても、もう既に消えてしまっている。故に咲や珠樹の間を通り抜けた外から吹き込む夜風は肌寒いまま。

だがそこにもう異常の気配はなかった。…幽霊屋敷の幽霊は消えたのだ。

「……帰るぞ」

だから、もう二人がここにいる意味はない。故に珠樹は小さくそ

う咳きと入つてきたりへと戻り始めた。腐りかけた床が軋み、離れていく。咲は先ほどまで闇に覆われていた部屋を見渡して少女が確かにいた空を見てから、その背中を追いかけて出て行った。

「……一時間か」

外に出た珠樹が、今時珍しい懐古時計を取り出して時間を確認する。その言葉に咲は、あの瞬くような出来事がそんなにも長い時間の中のことだったと思い知らされて、思わず溜息が出てしまった。……こうして奇怪に関わる度に思うのは、その幻のような体験がありにも刹那的であるという現実。あの闇に飲まれていた間も、珠樹が幽靈を焼き払っていた間も……咲にはまるで永遠のような時間に感じられたのに、実質は違う。

珠樹には普通に流れる時間を、自分には正常には受け止められない。

その違うこそが、自分たちの生きている世界を隔てるものだと、咲は理解していた。
だが、その度にこうも思うのだ。

「珠、」

「……なんだ」

触れる、珠樹の腕のぬくもり。並んで歩くその帰路の影も、二人が確かにここに存在していることを証明している。
例え、この女が違う世界の人間だとしても。

「また、行こうな

「いやだ」

俺は、何度もその世界に触れるだらう。

それほどまことに、この異形を……愛しているのだから。

江野宮咲という男は、変な男だつた。
奴はいくらその異形に触れても、その異質に触れてもそれらを求める。

本来、常人である人が恐れるべきそれを奴は自ら望んで触れてくる。

そのくせ、触れたときに奴は人としての意見を口にするのだ。
鬼を人としか見れないくせに。

容易く闇に飲まれてしまふくせに。

なのに、奴は諦めない。

何度もだつて、奴は関わらなくていいその奇怪を引き寄せて…私を連れ出す。

何のためか、と聞いたことがある。

その時、奴は何の迷いもなしにそれを口にしたのだ。

俺は、珠樹を愛してるからだと。

私はその男がおかしくなつてしまつたんだと思つた。

だつて、私は魔女で男とは全く違う生物だ。

例え同じ時を生きていって、同じ人間のように振舞つていたとしても。

その根本は全く違う、闇に生きる存在。

そんな存在に、愛情など抱ける筈がない。

だから私は、奴の言葉を否定した。

お前は人で、私は魔女で。

全く違う、存在などだと。

けれど奴は、笑つたのだ。

「それでも、俺はお前を愛している」

終わり。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6494m/>

紺碧の夜の魔女 / 幽霊屋敷

2010年10月8日14時13分発行